



相馬凸凹学会を設立しました！

凸凹新聞

相馬の歴史を探求する

2023年
9月号
Vol. 1

発行：相馬凸凹学会

石戸神社に伝わる メノコの伝説

相馬地区は西の白神山、南の大鱧山地から続く丘陵・台地と、河川流域の平坦地からなる凸凹した地域だ。白神山地が火山の噴火で堆積した火山岩の地層であるように、相馬地区も基礎地層は火山岩などからなっている。だから屏風岩や沢田神明宮のような奇岩が多い。また、凸凹した地形で洞窟のような箇所も多く、古くから人が住み着いていたようだ。その証拠に縄文時代の遺跡や遺物が多数出土している。

うとしたものの、あまりに広すぎて断念した経緯があるというから、メノコの居館という伝承もあながち作り話とは言えないかもしれない。

もしれないが、アイヌ文化が成立したのは中央で、またひと口にアイヌといっても地域によって成り立ちや文化はさまざまだ。津軽のアイヌもきつと独自の文化をもっていたに違いはない。



今年6月に供えられたアイヌの祭具。イナウと呼ばれるものか？

平安時代に大和朝廷軍に征伐されてメノコも討ち取られて中央の文化に飲み込まれてしまった。湯口の石戸神社にはメノコの首を埋葬したと伝わる石塚がある。「黒岩の滝」というところで討ち取られたが、死後も生首が呻き声をあげ続けたので首を土中に埋め、何枚も石を積み上げて閉じ込めたと伝わる。似たような話は全国にけっこうあって、有名なところでは平将門、桃太郎伝説のモデルとなった温羅伝説などだ。これはおそらく中央が征伐した相手を恐ろしい存在と印象付けるための常とう手段だったのだろう。

今も行われている アイヌの慰霊儀式

あまり知られていないようだが、石戸神社にはメノコの七人の部下を埋葬したとされる場所もある。毎年六月にアイヌ民族団体の方々がメノコとこの七人の部下たちの霊を慰めるために石戸神社にやってきて慰霊の儀式を行っているそうだ。

凸凹新聞

2023年9月号 Vol.1 (2023年9月1日発行)

◆発行者

相馬凸凹学会 (代表・加賀新一郎)

〒036-1592

青森県弘前市大字五所字野沢41番地1

(弘前市相馬庁舎内)

電話：090-3102-6110 (地域おこし協力隊)

E-mail : souma.chiikiokosi@gmail.com

相馬凸凹学会のメンバー大募集！

相馬の歴史を研究し、語り合うメンバーを大募集しています。入会資格は一切問いません。相馬が好き、歴史が好き、相馬のことをもっと知りたいという人なら誰でもOK。学会といってもサークル的な集まりで、とくに規約もありませんので、趣味の延長として相馬の歴史や地形などを一緒に研究してみませんか。

ただ、凸凹地形だからこそ生まれた、相馬独特の歴史・文化というものは少なからずあるはずだ。言葉は悪いが、隠れ住みやすい地域だったために平家の落ち武者も落ち延びてきて、そこから「沢田ろうそくまつり」という有名なお祭りが伝えられるようになった。鎌倉時代には、蒙古が襲来したいわゆる文永・弘安の役（一二七四・一二八一年）の際に現在の長崎県の対馬の人たちが多数避難してきたという。「早く寝ねば山がらモッコがくるぞ」と幼子に諭したことがある人も多いかと思うが、このモッコとは蒙古のことだという。中世には多田玄蕃という武士が主君である津軽為信に反旗を翻し、藍内に隠れ住んだという。最終的には藍内の沢筋で討ち取られるのだが、その沢には「玄蕃沢」との名が今も地図に記されている。肝心なのは、そうやって避難してきた人などを相馬の人々は常に温かく迎え入れ、守ってきたというのだ。

先述した持寄城も、鎌倉幕府崩壊のうちに、ここに立て籠もった軍勢のために食料や武器などを持ち寄ったことから、そ

の名がついたともいわれる。外部から来た人や困った人を地域で助けるという土壌が、相馬には根付いているのだと思う。それは、東北全体に広がることも可能ない。世界文化遺産になった青森市の三内丸山遺跡は、家族ごとや小集落ごとの暮らしが一般的だったとされる縄文時代において多くの人が寄り添ってくらししていた大規模集落跡が見つかったことで注目された。都市ともいえるような大規模集落は他に類を見ないことから、東北が縄文時代の最先端の地域だったと称されているののひとつになっている。助け合いながら生活するという概念が東北ではいち早く根付いていた。



相馬地区の航空写真。丘陵台地の先端に広がる凸凹した地形だということがわかる (c Google earth)



弥生時代の環濠集落（吉野ヶ里遺跡）

環濠集落がないその意味とは？
縄文時代の次は弥生時代だと学校で習った。しかし、北海道と沖縄、そして北東北は弥生時代とは呼ばない。弥生文化三点セットー水田稲作・弥生式土器・鉄器ーが普及しなかったからで、弥生時代に相当する時代を続縄文時代という。青森圏域は一部で水田稲作の跡が見つかってはいるが、弥生式土器と鉄器は確認されていない。さらに特筆すべきは、環濠集落が見つからないことだ。環濠集落とは濠や土塁、柵で囲まれた

た集落のことで、弥生時代の代表的な集落形態だ。諸説あるものの、他集落からの襲撃に備え防御性を高めたものだと考えられている。その環濠集落がないということは、集落間の激しい争いごとがなかったと考えられるのである。相馬もまた、前述したように外部の人や困った人を温かく迎え入れる争いのなかった地域だったと想像する。しかし、坂上田村麻呂軍による征伐で中央権力の支配が及ぶようになると、凸凹地形ゆえに合戦が行われることも増えていった。

激しい戦いが行われた場所を「がんじやこ」というそうで、相馬地区内にもいくつかある。凸凹地形に守られ、ときに翻弄され、相馬の人々は歴史を積み重ねてきた。その歴史を知ることが、地域を知るための第一歩だと思ってい

る。そんな思いのもと、凸凹学会を設立した。

※本記事は、郷土史家の澤田建雄さんにうかがったお話をもとに、地域おこし協力隊の加賀新一郎が独自の調査と考察を加えて作成しました。文責はすべて加賀新一郎。

●相馬凸凹学会とは

津軽平野の南端に位置し、台地と平地が入り組んだ凸凹地形の相馬の歴史を地形・地理・地名といった新たな視点も加えて調査・研究・記録するサークル。
代表・加賀新一郎、会員・穂坂修基、對馬和也、鎌田祥史